

ムラ社会の意識構造

齊藤 征雄

室町時代に、わが国の農業社会においては惣村Ⅱムラが形成された。神社の祭礼、農業の共同作業、入会地や灌漑用水の管理、自警などを目的としたもので、少数の指導者と、寄合によって運営される自治組織であった。そして、村民の守るべき規約「村掟」が決められ、それにそむけば罰金が科され場合によってはムラを追放されることもあった。

ムラ社会の特徴は、集団主義である。みんなが一緒になって同じことをする、そこに強い連帯意識が生まれるのである。したがって少数の反対意見の存在は、基本的には許されず迷惑なことだった。個人の意見は抑えられ、最終的には大勢の意向に沿うべく「はからわれる」のである。

しかし競争がなかったわけではない。集団対集団、個人対個人はむしろ激しく競争する。そのことが組織の効率を上げるとともに社会の活力を生み出す結果となった。現にそれによって農業の生産性は、大幅に向上したといわれる。

一方で競争は、軋轢を生じる。そのことによる集団全体の効率を妨げないように生み出されたのが、責任を集団全体でとるという仕組みだった。仮に失敗があっても、集団の行動は集団の総意でやったことだから、個人の責任は問わないという暗黙の合意である。

もう一つ、日本社会を特徴づけるものに江戸時代に儒教理念をベースに確立した家長的家族制度があった。この制度は、家長の絶対的権威の不合理性ももちろんあるが、それよりも日本社会全体に男尊女卑の観念を強く浸透させたことの問題が大きい。

こうした歴史的背景のもとに明治以降の近代化が行われ、今日の日本社会がある。そして日本社会は、目覚ましい発展変化を遂げたのである。しかし反面、最近のいろいろなことを見るにつけ、ムラ社会の意識構造がいまだに残っているのが現実であることを知らされる。

政治の世界では、自分の所属する派閥を指していまだにムラという言葉がまかり通っているらしいから、推して知るべしである。